

明にも欠かせないものである。このような広域的情報は、また、エアロゾルの間接効果として重視されている雲核として雲の状態を変える効果の解明にも貴重な資料を提供するものと考えられる。

以上の観点から、航空機・船舶等を用いて、わが国近傍の極力広い空間領域を対象とした微量気体・エアロゾルの系統的観測が望まれる。幸い WCRP においては、海洋の観測、雲の放射特性の観測などの一連の観測計画が広域を対象として立案されているので、それらの一環

として微量気体とエアロゾルの観測を進めるのが現実的であろう。

3.2.3. 参加研究機関

予定される主な参加研究機関は次の通りである；
北海道大学（理学部・工学部）、東北大学（理学部）、
東京大学（理学部）、埼玉大学（理工学部）、名古屋大
学（水圏研、空電研）、気象庁、気象研究所、公害研
究所、電波研究所

齋藤直輔 著

天気図の歴史

— ストームモデルの発展史 —
気象学のプロムナード 5

東京堂出版、1982年2月刊、
A5判、215頁、3,200円



「歴史」という書名から博物館的天气図の陳列を想像する人も、あるいはあるかも知れない。しかしこの本は、そのようなカビ臭さとはほど遠い。「ストームモデルの発展史」なるサブタイトルにも示されるように、温帯低気圧という生き物の、その深遠な実体をつかもうとして、我々の先達がどのようなアプローチを続けて来たかの物語である。しかも本書の後半は、「歴史」というよりは、むしろ「現代史」と呼ぶにふさわしく、また「天気図の……」というよりは、むしろ「シノプティック気象学の……」と名付けるにふさわしい。

すなわちそこでは、「質量の発散・収束からみた低気圧の三次元モデル」や、「ロスビーと上層偏西風の波動」、「準地衡風モデル」などの章が設けられており、必要最小限の数式と、逆にたくさんの図を用いて、これら気象力学的概念についての解説がなされている。しかもそれは単なる祖述ではなく、著者自作の図を用いた、いわば「齋藤気象学」といった趣きで、たとえば傾圧不安定の説明などにも、普通の気象力学の本にはない味わいと明快さがある。また、東シナ海を東進する低気圧を例にと

っての流線分布の模式図などは、立体感にあふれていて、眺めているだけで楽しくなる。

というわけでこの本は、気象学を学ぶ人一般のよい読物であることは勿論だが、特に全国の気象台で天気予報の仕事にたずさわる人達にはぜひ読んでいただきたいものである。

ただ惜しむらくは索引のないことで、「歴史」と名付けるからには、せめて人名の索引だけでもつけて欲しいと思う。

さて著者は、天気図が力学と結合して来たプロセスをたどったあと、「総観気象学とはもはや一つの表現法にしかすぎない」というような見解も世に生まれていることを憂えて、次のように述べている。「むしろ、そうではなく総観気象学は力学と協力して力学概念の監視者、助言者としての良きパートナーの役割を果さねばならぬ。現実の天気の反映である天気図の、細やかに注意深い考察が失われないようにすることが大切である。」

これは正に、天気予報の現場で私も常づね感じていることである。力学モデルではまだうまく捕えられていない現象すなわち問題点の発掘は、現実の天気あるいは天気図に毎日とり組んでいる者の仕事である。気象レーダー・衛星の利用度が高まるにつれ、天気図のあるべき姿はこれから大きく変わるであろう。そのような現在、天気図についてのこのようなレビューが出たことも、まことに意義深い。

(櫃間道夫)